

光陰は矢よりも迅かなり 身命は露よりも脆し

新しい年を迎え、多くの方が今年的目標を立てたり、何らかの抱負を思い描いていることでしょう。今、私が一番心に留めているのは、『修証義』の中にある、冒頭の一句です。

「光陰矢の如し」或いは「時は金なり」という言葉は、どなたでも「存知のことと思います。」

実は、この部分は、『修証義』の原典である『正法眼藏』では、「正師に出会う」との困難を述べる中で、早く正師に参じなければならぬ」と示されています。また、『修証義』では、「日々の行持（仏道修行）をなおざりにしてはならない」というように道徳的な解釈となっています。

確かに、その意味において、この言葉は決して目新しいものではなく、むしろ年頭の目標としてはありふれたものと言えるかもしれません。

ところで、こうした「時間を大切に」といった言葉が生まれた背景には、やはり私たちの命には限りがある、ということによっていると思われれます。生まれてきたものは、誰でもいつかは死んでいかなければなりません。また、過ぎ去った「時」ももとへは戻りません。しかし、そうであるからこそ、今ある命を喜びとし、大切にしたいものなのです。はかなさを悲しむのではなく、（いずれなくなるものであるからこそ）今あることを喜びとしたいものです。

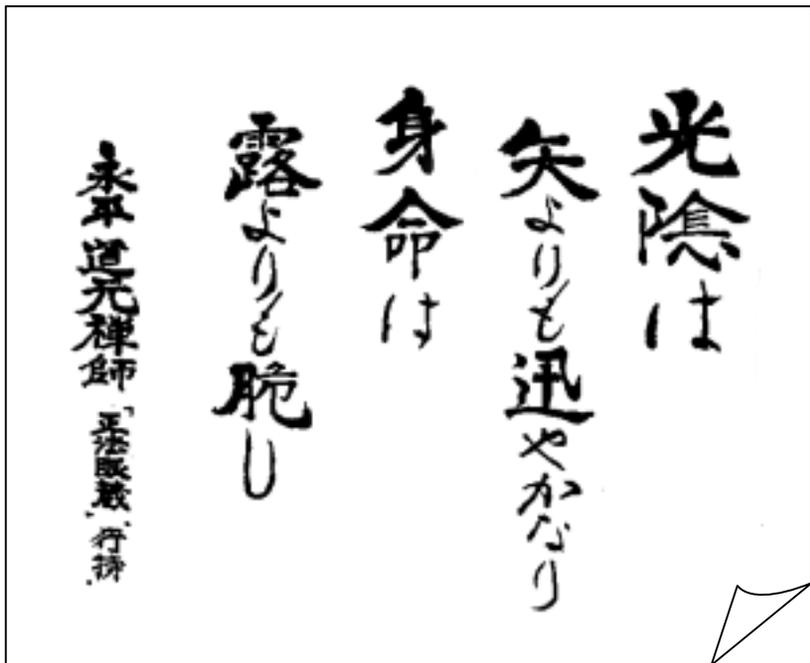
何もかもが輝いて見える、幼い頃の新年の想い出、そのように感じた瞬間がありました。それは「除夜の鐘」をつき終えて新年を迎え、外から建物の中へ戻ったときでした。

部屋の中の一つ一つのもが輝いて感じられ、新年を迎えた喜びを表しているかのようでした。

しかし、次第にそのように感じられることはなくなってしまう、今では輝いていた、という「思い」だけが残っているばかりです。

また、素直な心を取り戻し、今あることを感謝して新年を迎えたいものです。

この言葉は道元禅師の書かれた、『正法眼蔵』「行持」のなかの一節です。「行持」の行とは仏道修行のことで、持とは護持の意味でしっかりと保つこととす。道元禅師は、歴代の祖師方は常に修行に励み、文字通り行持を際限なく連続していたと説いているのです。また、その中で正しい指導者に逢うこととの困難さ、指導者がいても己自身が参ずる事が出来ない、また逆に参じようとしても指導者がいない、ということ述べ、時間を無駄にする事を強く戒めているのです。物事には時節因縁、つまりタイミングが重要です。志をもっているにも出会いのチャンス逃したら元も子ありません。日々の仕事に当てはめるならば、成功の鍵は最後までやり通す強い決意と適切な指導者に出会うことであると言ひ換えられましょう。そして、その好時節は一瞬なのです。



曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所
第五教区 布教部・出版部